トゥーキューディデースの歴史記述の意図

——κτῆμα ἐς αἰεί をめぐつて——

永井康視

【要約】トゥーキューディデースは自らの『ヒストリアイ』を、一時の称讃目当てのものではなく、「永遠の所有」として書き纏めたと述べる。その意味するところは今日まで種々の方面から理解されて来た。或はその科学的な歴史記述の故に、或は永遠不変のピュシスとの関連から。しかし、それらには幾分近代史学からの類推による理解が常に含まれていて、トゥーキューディデース自身が真に意図したものは捉えられていないように思われる。

私はここに「ヒストリアイ」自身を再吟味し、その精神的構造を分析して、彼の歴史記述の真の意図を明らかにし、そこよりひるがえつて「永遠の所有」の意味を理解しようと試みる。

彼の真の意図は、永遠不変の人間性が事情の変化に応じて如何に現われるかを、現在の事象の中に糺明しようとするにある。現在の事実のみが当時にあつては正確な智識をあたえ得るものであり、かつてない多くの災厄を含んだペロポンネーソス戦役こそ人間性を多方面から考察する機会をあたえる。その正確な記述が、後世不変の人間性の故に類似の事象が起るとき、豫備智識となり事を処する先見の明を養う助けとなる。勇をもちこの先見の明をもつて指導者が事に当れば、誉れあるポリスを後世に遺すこともできる。かかる精神のもとに、事実の正確な記述が「永遠の所有」となるとトゥーキューディデースは考えていたように思われる。

一　序

ヘーロドトスが初めて歴史を書いたとすれば、トゥーキューディデースは初めて歴史を探究したとシャーデヴァルトは云う。[1] たしかに、歴史研究の目的と意義とを初めて意識し、それによつて歴史を記述しようとしたのはトゥーキューディデースであると云うことができよう。[2]

それでは彼は、どのような意図をもつて、歴史研究に従

事したのであろうか。こう問うことは、既に多くの研究のなされた現在においても、なお必要な課題である。[3] 彼の歴史記述の意図を吟味するのが本論の主題である。それがために、彼自らその作品を永遠に遺るといつた κτῆμα ἐς αἰεί（永遠の所有）という言葉をめぐつて、論を進めたいと思う。まずその考察に先立つて、かの有名な方法の章の一節を引用しよう。

「この作品は、聞くには恐らく、それらの記述が物語り風でないので（τὸ μὴ μυθῶδες）魅力に劣しいものであろう。しかし、過去の出来事や将来いつかまた人間性の故に（κατὰ τὸ ἀνθρώπινον）生ずる、同一あるいは類似の出来事の真相を明らかにしようとする（τὸ σαφὲς σκοπεῖν）人達が、それを有益（ὠφέλιμα）であると判断すれば充分であろう。これは一時の聴衆目当ての懸賞作品としてよりも、むしろ永遠の所有物（κτῆμα ἐς αἰεί）として書きまとめられたものである。」（i. 22. 4）

トゥーキューディデースは永遠に遺されるべき作品を書こうとしたのである。

永遠に遺さんがために作品を書こうとしたのは、トゥーキューディデースばかりではない。ホメーロスも人間の残した偉業を歌わんとしたし、[4] ヘーロドトスもその『ヒストリアイ』の冒頭に、「人間の功業が時と共に忘れ去られることがないように、また、ギリシア人とバルバロイとの示した驚歎すべき偉業が顧みられなくならないように、その他のことや、また、彼らがお互に戦つた原因をも不明にならないように」発表すると述べている。

これは、レーヴィットの指摘するように、[5] 人間を「死すべきもの」と呼ぶ国語をもつたギリシア人として、純粋な、かつ深い意識の底に、一切の人事のはかなかさを感じとり、過ぎ去りゆく偉業を後世にまで保存せんがためには、ヒストリアイの必要を痛感したが故であると考えることもできよう。トゥーキューディデースも、ペロポンネーソス戦役は、バルバロイの一部をも入れてギリシア人間に生じた最大のものであり、最も語るに足るものとなることを予想し、開戦と共に書きとどめた(i. 1)、と述べている。人間の遺した偉業が、また彼にとつても重大な課題であつたということができる。

しかし、事件の最大の故に書きとどめたということだけ

が彼の真意ではない。そこには、これまでの歴史家たちとは違つた理由と意義とを意識していた。それなればこそ、方法の章を設け、他の歴史家たちとは違つた点を強調しようとしたのである。その点とは何か。それを知ることこそ本論の主題である。が、まず「永遠の所有」の意味するところを、現在までの研究者たちの理解にそつて次に列挙してみよう。先に引用した箇所を中心として、大体次の三点から理解されている。

一、その作品は、事の真相を明らかにしよう（τὸ σαφὲς σκοπεῖν）とする者のために書かれたもので、そのため、聞いて魅力ある物語り風のものではなく、真実を探求（ἡ ζήτησις τῆς ἀληθείας, 1. 20. 3）しようとするものであつた。それ故、その記述にあつては、「戦役中に行われた事実は、偶然そこに居合わせた人から聞いて書いたり、自分の考えによつて書いたりしてはよくないと思つて、むしろ、自分が親しく居合せたことも、また、他人から聞いたことも、出来るだけ正確にその各々について吟味して書くべきであると思つた。ところが、その各々の事件に居合せた人々は、同じ事について同じことを語らなかつたし、また人は一方に偏した好意や記憶をもつていて、それを確めることは骨の折れる仕事であつた」（i. 22）という慎重な批判的な態度をとつている。これが近時トゥーキュディデースの科学的記述として高く評価されるところであるが、「永遠の所有」も、この科学的記述の故に永遠に遺ると理解しようとする。[6]

二、また、人間の本性は不変である（iii. 82. 2）から、現在起つていることは、将来もまた同一あるいは類似のことが生ずるであろう。こういう歴史事象の繰返しを信じていたから、その不変の人間性の故に（κατὰ τὸ ἀνθρώπινον）、現在の正確な記述は後世にも価値あるものとして遺ると理解する。[7]

三、次に有益（ὠφέλιμα）であるという点を強調して、将来への有益性を考えて記述したものであるから永遠に遺ると考える。しかし、ポリュビオスなどに見られるように歴史は戦争の技術及び政治家の学校という意味で、実用的なものとして考えたとはもはや一般には認められない。[8] しかし、前二者に重なるような意味で、この有益性を無視するわけにはゆかない。[9]

以上の諸点より「永遠の所有」は理解されて来た。その

一を強調し一を否定することなく、互いに相重なるものとして総合的に理解すれば、或はその意味するところも明確になろうかと考えられる。しかし、ただ総合するだけでは何一つ具体的なものは現われない。むしろそれを統合する中心となるものを見出さなければならない。それこそトゥーキューディデースの歴史記述の意図である。これを見出すために先ずこれら永遠の所有についての諸解釈の吟味から始めてゆきたいと思う。

二　科学的記述

トゥーキューディデースの記述が科学的であるといわれる一つに、その記述が物語り風でないという点が挙げられる。

物語り風でないといえば、われわれは、イオーニア散文の伝統を受けて柔らかい静かな流れをもつヘーロドトスの文章に対して、ソプィステースの影響を受け言葉の選択を厳にしたトゥーキューディデースの文体には、ある種の抵抗を感ずるであろう。[10] しかし、われわれがシケリアー遠征などの記述を読むとき、そのすぐれてドラマティックな構成に驚歎する。それ故一方では、彼の作品はドラマティックであるともいわれ、[11] また、芸術的であるともいわれている。[12] つまり、トゥーキューディデースが物語り風でないというのは、その構成が物語り風でないという意味ではなく、記述の態度に虚飾を交えないということである。事実、彼が物語り風ではなく真実を探究したものだというヒッパルコス刺殺についての記述（i. 20; vi. 54 ff）にも、コンフォードの指摘するように、[13] 記述の仕方に伝説的神話的な叙述の型（たとえば Herodotos i. 60）が見られる。つまり、物語り風でないということは、われわれがそれによつて連想するような、固苦しい歴史理論を展開するとか、歴史的法則を記述するという意味ではなく、どこまでも事実に基いて吟味し（ἀπ' αὐτῶν τῶν ἔργων σκοπεῖν, i. 21. 2）、出来るだけ広範囲に吟味して後、信ずるに至つた証拠に基いて（ἐκ δὲ τεκμηρίων ὧν ἐπὶ μακρότατον σκοποῦντί μοι πιστεῦσαι ξυμβαίνει, i. 1. 3; Cf. i. 20. 1; 21. 1）正確に（ἀκριβείᾳ, i. 22. 2）書きまとめるというその科学的な態度のことなのである。[14] そこで、彼が真実の探究（ἡ ζήτησις τῆς ἀληθείας. i, 20. 3）という場合も、ここに云う ἀλήθεια とは当時哲学者間に

用いられた「真理」という意味ではなく、どこまでも正確な事実という意味であつて、[15] 真実の探究とはつまり科学的記述というのと殆んど同意語なのである。

こうした彼の科学的態度が近時高く評価されるのも、近代史学がその資料の厳密な批判という科学的態度から先ず開かれて来たところより考え合せば、また当然なことでもあろう。真実を探究するということは、ヘカタイオスにもヘーロドトスにも見られるところであり、イオーニアに起つた自然哲学と共に発生したギリシア史学の伝統的な要求であつたということができよう。[16] しかし、真に現在いうところの科学的批判的精神を確立したものは、トゥーキューディデースに始まるといわなければならない。しかし、その科学的な記述の故に直ちに彼の『ヒストリアイ』が永遠に遺ると考えたとする見解には、幾分近代史学からの類推が含まれているように思われる。というのも、それを証する彼による直接の言葉は『ヒストリアイ』の中には見当らないからである。

三　人間性の不変

人間の本性は同一であり不変であるとする考えは、医学の発達などに伴つて発展し、[17] ソフィステース期に盛んとなつた。アンティポーンもその『真理』の中で「自然によつては〔本性上は〕(φύσει) われわれ、バルバロイにせよギリシア人にせよ、凡ての者は凡ての点において同じように生れついている」(frg. B Col. 2. 10 ff) と述べている。

『ヒストリアイ』の中にも「人間同志である以上そう変るものではない」(i. 84. 4) と見られるし、また、ケルキューラにおける内訌の残酷さを記述して後、次のように述べている。

「このようなことは、人間の自然（プュシス）〔本性〕(φύσις ἀνθρώπων) が同じである限り、起るものであり、かつ、永遠にあるだろうもの (αἰεὶ ἐσόμενα) であるが、それぞれの事情の変化が現われるに応じて、より以上であつたり、より穏かであつたり、その様相が変えられたりする。」(iii. 82. 2)

即ち、人間が創る歴史事象は、環境の変化に応じてそれだけ変化するが、歴史を創る人間の本性 (φύσις) そのもの

は不変であるから、類似した環境には類似した現象が生ずる。[19] それ故、現在起つていることを正確に書きとどめるならば、将来、同じような現象が起つた場合、その結果を予想するための予備知識となり、それによつて事の真相を知ることができ、それが後世に役立つことになるであろう、とトゥーキューディデースは考えていたように思われる。それは、アテーナイに発生した疫病について記述するところに最もよく表わされている。

「自分もその疫病にかかつたし、他の人々のかかつているのを親しく目撃もしたので、それがどのようなものであつたかを話すと共に、もしいつか、またしても襲つて来るとき、それによつて人が調べる（σκοπεῖν）ことが出来、とりわけ予め知つておれば（προειδώς）認知できるような事柄を話すことにしよう。」（ii. 48. 3）

永遠に変らない人間の本性は、その事情の変化に応じて種々の現れ方をするが、どのような環境にどのような現われ方をするだろうかということをトゥーキューディデースは探究したように見える。これは『ヒストリアイ』全編の中に種々の形で処々に述べられているが、とりわけ、アテーナイに発生した疫病（ii. 47—54）とケルキューラにおける内訌（iii. 69—85）の記述に、それによつて惹起される人間の感情や行動の変化を如実に、纒つた形で画き出している。

その一二の例を挙げると、疫病のために次々と隣人の死んでゆくのを目撃すると、いままで抱いていた神々に対する畏怖の念や人間の作つた掟は、もはや彼らを制するに何らの力ともなり得ず、既に宣告され差迫つた死という刑を前にして、それのふり掛らないうちに何とか人生を享楽しなければならないと考えるようになつたとか、また、内訌に際しては、強慾や私的野心が人々を支配し、思慮ある行為は怯懦と見られ、逆に無謀な大胆さが勇気だと称讃されて、乱暴な人間が信用され、穏健分子は次々と撲滅されて、比較的智力に劣つた人間が優位を占めた、など、するどい人間感情の分析を試みている。

こういつた人間感情の変化は、時を経、所を隔てたわれわれにも、充分不変のものとして理解することができる。トゥーキューディデースのいう人間の自然〔本性〕の不変という事実は、現在においてもなお変らない真理であると

いうことができよう。[19]

四　自然の探究

また、自然（ピュシス）という言葉は、事物のアルケー的存在として、事物の本性という意味をもつていると共に、φύεσθαι（生長する）と同根の言葉として、生長する事物をそのように生長せしめる、事物それ自身の中にある運動の原因として、事物に固有の、決して外部の事情や関係によつて左右されないものとして理解されていた。[20] それ故、人間の作つた法習（ノモス）が時と所によつて常に変化するのに対して、自然（ピュシス）の法は不変であるとして、両者を対立して用うるのがソフィステース期の流行であつた。[21] アンティポーンも「法習の命令は随意的なものであるが、自然のそれは必然的なもの（ἀναγκαῖα）である」（Antiphon, frg. A Col. 1）といつている。

『ヒストリアイ』の中にも、しばしばこういつた考えに出合う。例えば、

「誰れにせよ、人間の自然（ἡ ἀνθρώπινα φύσις）が何かをなそうと夢中になつているとき、法の力やその他の強力なもので、何とか阻止する術があると考えるものがあれば、それは全く出来ない相談であり、また愚直な考えでもある。」（iii. 45. 7）

これはディオドトスの言葉として画かれた考えであるが、トゥーキューディデース自身も事象の中には如何なる力でも制し得ないもののあることを観察している。例えば、疫病に脅かされ死を直前にした人達には、神に対する畏怖も人間の掟も、彼らを制するに何らの役割をも果さなかつたといい（ii. 53. 4）、また、食糧不足で不満を抱き出すと、それを阻止する力はなかつたという（iii. 28. 1）。

更に、次の記述に注目しなければならない。いわゆるメーロス人の対話（v. 85—113）と呼ばれているもので、アテーナイからの使者は次のように述べている。

「神に関することは臆測によるが、人間に関することは確かに、常に自然の必然性によつて（ὑπὸ φύσεως ἀναγκαίας）強者が支配するものとわれわれは考えている。しかも、われわれがこの掟を設けたものでも、制定されたものを初めて用いたものでもない。存在するもの（ὄντα）を受けとつたのであり、この永遠に存在するであろうもの（ἐσόμενον ἐς

αἰεί) を伝え遺そうとしてそれを用いているのである。諸君でも他の者でも、同じ力を握れば同じことをするだろうことをわれわれは知つている。」(v. 105. 2)

先に、われわれは、それによつて行動すれば制止することのできないプュシスが人間にあるのを見たのであるが、ここでは更に具体的に、そのプュシスとは強者が弱者を支配することであると断言している。そして、このプュシスは常にあり、同じ事態が生ずれば誰れでも同じことをし、それは過去においても現在においても、また将来においても、永遠に変ることなく存在するであろうといつている。

これはアテーナイ人をして云わしめた言葉であつて、トゥーキューディデース自身のものではないかも知れない。事実、他の箇所(i. 76. 2)でも、強者が支配するのは理の当然であるとアテーナイ人をしていわしめている。即ちトゥーキューディデースは人間を支配する制止することのできないプュシスが人間にあることを認め、かつそれが永遠不変であるとしたのであるが、そのプュシスは強者が弱者を支配することであると単純に信じていたか否かは、ここでは断言できない、更にその考察を進めなければならない。

強者が弱者を支配するという思想は、当時ソフィステース間に流行していた思想であり、「強者が弱者を支配し、より多くをとるのは自然の法によること (κατὰ νόμον τὸν τῆς φύσεως) である」P(laton, Gorgias 483 D E) とか、その他、そういつた単純な形ばかりではなく、強者 (κρείττω) とは優者 (βελτίω) と同じ意味なのか、といつた問も投げかけられて (Plat. Gorg. 448 C 以下参照)、強者支配の思想は更に形を変えて、「賢者にはより多くを、愚者にはより少量を分つべきである」(Plat. Prot. 337 A) といわれたり、また「ヒストリアイ」の中でもアルキビアデースは「大なる自尊心をもつている者が平等でないのは不当ではない」(vi. 16. 4) といつている。これらは強者支配の思想が形を変えて現われているのである。

トゥーキューディデースも強者が弱者を支配するのが自然の法であると単純には信じてはいなかつたが、この強者と弱者とを対立させてものを考える仕方が、『ヒストリアイ』全編を通じて現われているのをわれわれは見逃すわけにはゆかない。「つまり、利を求めて弱者は強者の奴隷となり、有力な者達はあり余る富を握つて弱小諸都市を掌中

おさめて支配した」（i.8.3）といつた記述を残しているし、また、勢力の強いものが如何にその弱いものを支配し、弱いものは如何に強いものの力を恐れ、一方、強いものは如何にしてその覇を保とうとしたかといつた形で、全『ヒストリアイ』の記述がなされているからである。[20] ペロポンネーソス戦役の原因を真先にあげて「その真の原因（ἀληθεστάτη πρόφασις）は、言葉の上では最も現われなかつたことであるが（ἀφανεστάτην δὲ λόγῳ）、アテーナイ人が強大となつてスパルテー人に恐怖をもたらし、やむなく戦争に入らしめたこと（ἀναγκάσαι ἐς τὸ πολεμεῖν）であると私は信ずる」（i.23.6）と言つているが、ここにも同じく強者と弱者とを対立させてものを見る思想がその底に流れているのを感ずる。また、アテーナイ人が強大となり、諸国がそれに対して怖れと憎しみを抱くに至る所以を述べようといつて（i.89.1）戦役に至るまでの五十年間（480–431 B. C）を記述するとき、その記述の理由を述べて（i.97.2）、まずその期間の記述をこれまでのどの歴史家も見過していたこと、更にこの期間の出来事が如何にしてアテーナイ人がその支配を確立したかを明らかにするからだといつている。これによつても、支配の確立とその喪失といつた力関係から歴史事象を考察しようとする方法は彼独自のものであることを示している。単に、如何なるものが国家の支配者となるか、これは当時のソフィステース間の論議の中心課題でもあつたが、こういつた個人間の支配関係ばかりでなく、諸国間の支配関係をも、強者と弱者との対立から考察しようとしているのは、実に当時流行の強者支配の思想がその底に横つていたからということもできるだろう。また、このような背景があつたればこそ、かのすぐれた政治史を確立し得たということができよう。

こうして、単なる事件の羅列ではなく、その事件の底に横つてその事件を動かしている何らかの必然的な力を考察しようとしていることは、言葉の上では最も現われなかつたことであるが（ἀφανεστάτην δὲ λόγῳ）とか、やむなく戦争に入らしめた（ἀναγκάσαι ἐς τὸ πολεμεῖν）とかいう表現の中にも現われている。またプュシスという言葉が、自然の必然性によつて（ὑπὸ φύσεως ἀναγκαίας）という表現をもつように、プュシスは、事物それ自身の中にあつて、事物を動かす運動の原因という意味をもつていたが、トゥーキューディデ

ースは、プュシスを念頭に置くものとして、事象の中にその事象を動かす何らかの必然的な力を見ようとしていたことは明らかである。彼自身も、表面的な事件や言いふらされた理由に左右されることなく（i. 23）事実にもとずいて（τοὺς ἔργους）考察しなければならないこと（v. 26）を強調している。換言すれば、彼は人間のプュシスを事情の変化に応じて如何に現われるかを見ようとしたが、単に個人ばかりではなく、集団の中にも何かプュシスに類する集団を動かす力を考察しようとしているのである。事実一例を挙げると、恐怖や激情やまた利益を求めて権力を獲ようとする野心などが個人や集団の中にあり、それらが彼らの行動を左右しているという様が『ヒストリアイ』の中に考察されている。人間のプュシスを種々の事情の中に探究し、強者の支配はプュシスの法であるという思想を背景として、歴史事象の中にある種の必然的な力を考察しようとした点において、彼をプュシス探究者と呼ぶこともできるであろう。[24]

しかし、ここで注意しなければならないことは、なる程トゥーキューディデースは事象の中にかくれその事象を動かす何らかの必然的な力のあることを感知し、それを考察しようとはしたのであるが、それが故に、彼は歴史事象の中に必然的な法則を見出そうとしたのだ[25]とは言えないことである。事象の中に一般的な法則を見出そうとする考え方は、近代史学に属するものであつて、進化論による植物学や数学・物理学の発達にともなつて生れ出た思想であつて、前五世紀にはまだそのような考え方はなかつた。厳密な意味での因果律も見出されてはいなかつた。[26]もしそのような思想が存在していたとすれば、あのような歴史記述は残さなかつたであろう。その点については以後の考察から明らかになるであろう。

五　最大事件の記述

トゥーキューディデースの記述の意図を知ろうとするに当つて、ペロポンネーソス戦役をなぜ記述の対象としたかを考察することは重要である。

彼はペロポンネーソス戦役を記述しようとした理由として、その戦役がこれまで起つた如何なるものよりも最大（μέγιστον）であり、かつ最も語るに足るもの（ἀξιολογώτατον）であるということを挙げている（i. 1. 1；2. 2）。トゥーキュ

ーディデースは、それが如何に最大規模のものであつたかを論証（τεκμαίρεσθαι）して後（i. 2—21）、次のように述べる。

「それは規模において最大であつたばかりではなく、その期間が長く、またギリシア人間に、同じ年月間には例のないような災厄（παθήματα, οἷα οὐκ ἕτερα ἐν ἴσῳ χρόνῳ）が起つた。即ち、いままでにない程多くの諸都市が陥し入れられて荒廃し、また、戦争や内訌のために多くの人間が追放され、虐殺された。また、各地に起つた強烈な地震や、古来の記録にその比を見ないほど頻繁に起つた日蝕や、大変な旱魃、それによる飢饉や、また、大きな被害をあたえ処によつては潰滅させた疫病などについて、これまで噂では言われていたが、事実によつては（ἔργῳ）殆んど稀にしか確証されなかつたことも、信じられないものではなくなつた。」（i. 23. 1—3 概訳）

ここに注意すべきは、われわれには戦争と直接に関係をもたないと思われる地震や日蝕などを、都市の荒廃や内訌などと並列して挙げていることである。即ち、トゥーキューディデースは歴史事象を事件の相互関連から意味づけようとするよりも、そのような考え方は近代史学に属するものであるが、[27] むしろ事件そのものの大いさに興味を抱いていたのである。地震であれ日蝕であれ、それが非常なものであればすべて彼の興味の対象となつた。

『ヒストリアイ』の多くの部分はそれら大事件の記述に費されている。これ程までに多くの命を奪い、どこの記憶にも残されていない（47. 3）というアテーナイ人間に起つた疫病（ii. 47—54）、残酷さの最もはげしかつた（82. 1）ケルキューラにおける内訌（iii. 69—85）、ギリシア人に最も意外とされたスパルテー人の敗北（40. 1）となるピュロスの戦（iv. 3—23, 26—41）、今次戦役中最大規模の敗北（87. 5）となつたシケリアー遠征（vi. 1—vii. 87）など、その他最大と呼ばれた事件が数多く記述されている（i. 50. 2 ; ii. 77. 4 ; iii. 98. 4 ; 113. 5 ; v. 74. 2 ; vi. 31. 1 ; vii. 29. 5 ; 85. 4 ; viii. 97. 2）。また人物についても、最も赫々たる名声をはせた（i. 138. 6）パウサニアース、テミストクレース、当時最も有力であつた（i. 139. 4 ; iii. 36. 6）ペリクレース、クレオーンなど、当時卓越した人物の言論や行為が画かれている。これら人間を中心とした諸事件に合せて、日蝕（ii. 28）月蝕（vii. 50）つなみ（iii. 89）などにも言及し、広く自然界の諸現象をも研

究していたことが知られる。こうした歴史的関心と地理的関心とが密接に結びついているのは、いわゆる「散文作家」(λογογράφοι)において顕著であるが、ヘーロドトスに見られる程ではないが、トゥーキューディデースにもその伝統が流れているといえるだろう。無論、その諸事件の記述は人間を中心としたものであるから、自然科学者ではなく歴史家であることは言うまでもない。第四章でみた自然(プュシス)探究者の意味はまたこういう伝統のうちにも根ざしていたものである。[23]

ところで、トゥーキューディデースは事件が最大であり、語るに足るべきものであるが故にペロポンネーソス戦役を記述したと述べているが、なぜ最大事件であるが故に記述するに価するのであろうか。これには次の三点が挙げられると思う。

一、トゥーキューディデースが最大事件を記述するところ、ヘーロドトスと同様に時と共に忘れ去られることがないようにとの配慮からのみではないことは、既に第一章において指摘しておいたが、その意味をいま考察しよう。

彼はホメーロスの詩に歌われた乗組員の数に言及して「彼〔ホメーロス〕は千二百艘の船のうち、ボイオーティア人の乗組員は百二十名、ピロクテーテースのそれは五十人としたのは、私には、最大なものと最小なものとを示めそうとしたのだと思われる」(i. 10. 4)と述べている。つまり、最大と最小とをあらわせばその中間のものはそれによつて推測されると考えたとするのである。これと同じように、彼の画こうとする事柄も、最大事件を記述すれば、その他それに類したものは、それによつて充分推測できるものと考えたように見える。

例えば、当時処々に起つた内訌については、しばしば彼は言及するのであるが(iv. 7; 25; 45; 67; v. 76; 116; vii. 33; viii. 60など)、その最も古いものの一つであつただけに、また最も残忍を極めた(82. 1)ケルキューラにおけるものを記述して(iii. 69—85)、そこにおける人間感情の変化を詳細に分析する。そして、その他の場合はそれに類似するものとして(82. 3)、再びは取り上げようとはしない。これも、彼が探究しようとしたのが、諸現象間の因果関係ではなく事情に応じて変化する人間性であつたから、最大事件がそれに類した諸事件の内容を含んでいるものと考え得たので

あろう。

二、次に考えられることは、彼はペロポンネーソス戦役間に多くの災厄が生じ、今まで噂では聞いていたが、事実によつて殆んど稀にしか確証されなかつたこと（ἐάν τε δὲ παντοιότερον βεβαιούμενα）がいまや信ぜられなくはないものになつたといつている。この事実によつて確かめることができるもの、これがトゥーキューディデースにとつての重要な研究対象であつた。

ヘーロドトスは過去の珍らしい出来事を記述しているが、トゥーキューディデースにとつては過去の出来事は「その多くは時の経過により伝説の領域に入つて信ぜられなくなつたもの」（τὰ πολλὰ ὑπὸ χρόνου αἰτίᾳ ἀπίστως ἐπὶ τὸ μυθῶδες ἐκνενεμημένα, i 21. 1）であるから、それについて述べることは彼の興味の対象ではなかつた。どこまでも事実によつて確証できるものでなければならなかつた。それ故、両者は同じく大事件を画こうとしたが、それが信じ得るものであろうが信じられ得ないものであろうが語られているものであるから記述する(Herodotos, ii. 123. 1; iv. 195. 2; vii, 152. 3)といつたヘーロドトスの記述態度とトゥーキューディデースのそれとは全く違つたものであるといわなければならない。[29] 彼ら両者が殆んど同時代の人でありながら、読者に遠く隔つた人であるかの感をあたえるのもこのためなのである。[30] また、トゥーキューディデースが現代史を選んだのもまさにこの理由によるのであつて、言語学や考古学などの歴史学における補助的な科学がまだ発達していない当時、人に聞いたり自ら見たりする以外殆んど事実を確かめ得なかつた当時にあつては、正確な科学的な研究を残すためには現代史を選ぶの外はなかつた。資料が余りにも多い現在、現代史を研究するのとは自ら違つた意味をもつていたのである。

三、次に考えられることは、ペロポンネーソス戦役間にこれまで例のない程多くの災厄がギリシア人間に起つたということである。人間性が事情の変化に応じて如何に現われるかを探究しようとしたトゥーキューディデースにとつて、これこそ重要な条件であつた。即ち、起つた災厄が多種多様であつて、事実によつてそれが確証し得るとすれば、事情の変化に応じて種々の形で現われる人間性を多方面から考察し得る機会をペロポンネーソス戦役研究はあたえる

からである。それによつて事実を正確に知ろう（τὸ σαφὲς σκοπεῖν）とする人々の予備智識となり（προεσδώσι）、利益（ὠφέλιμα）になろうと考えたのである。τὸ σαφὲς σκοπεῖν（先に真相を明らかにすると訳したが）とはこういう意味であつて、事情の変化に応じて種々の形で現われる人間性をよく見極め、それと同時に、諸事象を動かす力をよく知るということであつて、決して抽象的な真理とか法則を知るという意味ではないのである（Cf. K. Weidauer, Thukydides und die Hippokratischen Schriften, S. 51 ff）。このことは更に『ヒストリアイ』全体の構成を見るとき明らかになるであろう。

六　『ヒストリアイ』の構成

トゥーキューディデースの歴史記述の意図を知るためには、更に『ヒストリアイ』全編の構成に注目しなければならない。そこにはトゥーキューディデース自らの意識したもの及び無意識に形造られたものが含まれている。ここでは主として、むしろ無意識であつたかも知れないが、『ヒストリアイ』全体がそれによつて構成されている、ある一面を特に取り上げて考察してゆきたいと思う。そこにこそトゥーキューディデースが歴史を記述しようとした真の意図が握捉できると思われるからである。

『ヒストリアイ』は通常二つの部分に分けられる。初めの十年間の戦争（いわゆるアルキダーモス戦役）の部分（i—v. 20）と第二の序文（v. 26）をもつそれ以下の部分とである。各部分がいつ書かれたかは常に問題とされるところであるが、開戦と共に書き始め（i. 1）、時に応じて加筆しながら、一つの統一あるものに纏めあげられたものと理解するのが妥当であろう。その間、彼の死（前四百年頃）によつて中断させられるまで、三十有余年の間には幾分彼の記述の態度にも変化が生じたろうと思われる。しかし、『ヒストリアイ』全編を通じて根本的な思想の変化はなかつたといわなければならない。それが故に、また『ヒストリアイ』は彼がアテーナイの敗北を見て後統一的に書き上げられたものであるとも考えられているのである。[31] その構成は次の如きものとして見ることができる。

先ず歴史記述の意図及び方法が述べられ（i. 1—23）「アテーナイ人が強大となり、スパルテー人に恐怖をもたらし

たから」というペロポンネーソス戦役の原因が挙げられる（23.6）。そして、アテーナイ人はいかに諸国民に恐怖をあたえたかという表面的（i. 24—88）及び内面的（88—118）原因考がなされる。ここでは既に述べた力関係からの考察が特に注目される。そしていよいよ戦争を前にひかえての両者の戦備及び態度が画かれる（119—146）。これで第一巻は終り第二巻から以下戦争の記述に入る。戦争の記述に入ると、彼も明言する（ii. 1; v. 26）ように、夏と冬とを基準として、出来事の起るにつれて順を追つて記述される。そこに記述される事件は無論起つたすべての事件をではない。既に見たように人間性の諸相をより多く観察することの出来る大事件や彼にとつて語るに価する（ἀξιολογώτατον, i. 1, ἃ δὲ λόγου μάλιστα ἄξια, iii. 90. 1）と思われる事柄についてである。現在のわれわれにとつて重要な事件も彼は言及しないことも多い。それは当然であり、また決して歴史科学の客観性を破るものでもない。歴史家はすべて自分の精神において生き抜かれた経験を通じて、歴史的諸現象を考察しなければならないからである。[22]

ところで、『ヒストリアイ』に取り扱われる事件は一見多種多様に見えるが、彼が語るに足るものとして選び出し記述した点において、そこには統一もあり、一貫して流れる構成があるように思われる。これを把握すればトゥーキューディデースが歴史記述に意図したものを一層明確に理解することができる。その一例を次に挙げよう。

全編を通じて強者支配の思想を背景とした力関係からの記述が見られることは既に指摘したが、更に次のような側面が見られる。即ち、ペロポンネーソス戦役を前にして各国の諸将は種々の警告を発する。が、特に次のような点を強調しているように見える。とりわけ、ペリクレースの演説にそれらの多くが含まれているようにも見える。

一、事の成行きというものは、人間の考えもそうであるように、往々訳の解らぬ進路をとるものである（i. 140. 1）。偶然（τύχη）の事象も起る。

二、それ故、一時の成功を見たからといつて得意になつてはいけない（i. 120. 3）。即ち、希望（ἐλπίς）や慾望（ἔρως）にかられて、より多く（πλεονεξία）をとろうとしてはいけない。[23]

三、また、失敗したからといつて、公共の決議を支持しないようなことがあつてはいけない（i. 140. 1）。即ち、激情（ὀργή）に

かられて行動してはいけない。

四、戦の勝利は運（τύχη）によるより判断力（γνώμη）により、実力（δυνάμις）よりも勇気（τόλμα）によつてもたらされねばならない（i. 144. 4）。準備と思慮と勇気が戦捷をもたらす（ii. 11；13）。

五、また、公事を忘れ私利（τὰ οἰκεῖα）を求めてはいけない（i. 120. 1；141. 7）。

これらが戦争の初めにあたつて諸将の警告したところのものである。これらの警句を戦争の期間いかに守つたか、また、それらが守られなかつたために如何なる失敗をまねいたか、あたかもそれを実証するかの如くに「ヒストリアイ」の記述はその対象を考察してゆく。無論トゥーキューディデースはそれを意識したのではなく、彼のなした事実の探究が期せずしてそのような結果になつたものに外ならない。その一例を挙げると、

(1) 運（τύχη）によるアテーナイ人のピュロスにおける勝利（iv. 3. 1；12. 3；14. 3）[34]。運もあらんかと待機するブラシダースに有利に展開したメガラ攻撃（iv. 73. 3）。

(2) 幸運に自信をもつてアイトーリアー人を攻撃して失敗するアテーナイ人（iii. 97. 2）。幸運に酔つたクレオーンのアムピポリスにおける敗戦（v. 7. 3）。

(3) 思い通りにならなかつたからといつて公共の決議を無視して怒るアテーナイ人（ii. 21. 3；iv. 65. 3；vii. 14. 4）。

(4) 誤算が敗戦を招くデーリオンの戦（iv. 76. 5）アムピポリスの戦（v. 7. 3）。勇気が戦勝をもたらすテゲアーの戦（v. 72. 2）。

(5) 私的野心のために国家を崩壊に至らしめるアルキビアデース（vi. 15. 3）。

以上挙げた例は、無論、あるいは成功させあるいは失敗を招いた一面の理由だけであつて、トゥーキューディデースがその点を特に強調して記述しているというのではない。全編を流れているこういつた面からの彼の精神を要約すると次のようになるであろう。

すべての人間は本来私的にも公的にも過失を犯す性質をもつており（iii. 45. 3）、本来功名心（τιμή）恐怖（δέος）利益（ὠφελία）という強大な力に動かされるものである（i. 76. 2）。そして、人間の諸行為は時に運（τύχη）に支配されることもある（i. 78. 2）。しかし、疫病や天災などは運として己むを得ない場合（ἀναγκαίως）であるとしても（ii. 64. 2）、運と見られる多くの場合、実は判断（γνώμη）を欠いている場合が多いのであつて（i. 140. 1；iv. 17. 18；viii. 24. 5）、もし深慮を

もつて（γνώμῃ πιστευῇ）事実をよく見極めるならば、そこから勇気（τόλμα）も生じ（ii. 62. 4）、恐れを抱くことなく事を成就し得るのである（iv. 34 ; iv. 25. 9）。人は応々幸運時には希望（ἐλπίς）と欲望（ἔρως）とにかられてより多く（πλεονεξία）をとろうとし（v. 14. 1 ; iv. 108. 4 ; iv. 17. 4）、激情にかられては（ὀργῇ）危険を犯そうとするのである（iii. 45. 4）。人（国家の指導者）[15]は常に先見の明（πρόνοια）をもつて事にあたらなければならない（ii. 65. 5）。そして私利を追うことなく、ポリスあつての市民として（ii. 60）、常に国家の繁栄を願い（vi. 14）、現実を根拠とする判断によつて（γνώμῃ ἀπὸ τῶν ὑπαρχόντων, ii. 62. 5）、勇気（τόλμα）を断行しなければならない（i. 144. 3 ; ii. 39. 4 ; 42. 4 ; viii. 96. 4）。そこに最大の誉れ（μέγιστα τιμαί. i. 144. 3）永遠の記念碑（μνημεῖα ἀΐδια, ii. 41. 4）がうち立てられ、現代の人にも後世の人にも驚歎されるものを遺すことであろう（ii. 41. 4 ; cf. ii. 64. 5 ; iv. 18. 5 ; 87. 6 ; vii. 56. 2）。

これが『ヒストリアイ』全編の底に横つている彼の精神である。だからといつて、こうあるべきであると説こうとはしない。むしろ、正確な智識を獲ようと努め（v. 26. 5）、偏見なく事実を書き留めたとき、期せずしてこのような対象を、このような形で画き出すことになつたというべきだろう。即ち、彼の心の底に流れている歴史記述の意図はここにあつたといわなければならない。戦争の初めにあたつて警告したすぐれた指導者の言葉が、あたかも予言の如くに、戦争中に次々と実現されてゆくのを見るが、トゥーキューディデースの心の中には常にこのようなすぐれた指導者が念頭にあつたといわなければならない。それ故、テミストクレース（i. 138）やペリクレース（ii. 65）の「目前のことには最少の考慮によつて最有力な判断を下し、将来のことには起るべきことの最も遠きに至るまで最もよく予測する」（i. 138. 3）先見の明（πρόνοια）を称讃し、アルキダーモス（i. 79. 2）ペルモクラテース（vi. 72. 2）ニーキアース（vii. 86. 5）などのすぐれた指導者、またクレオーン（iii. 36. 6）アルキビアデース（v. 43. 2）などの当時有力な指導者に注目したのである。彼はこうした意味で未来の政治家に心を寄せていたということもできよう。[16]しかし、それだからといつて、政治家のための教科書を書いたのだとはいえない。以後更に明らかになるように彼の歴史記述の意図はそこに

はなかつたからである。彼がこうして政治史を書き、政治家に深い関心をもつていたということは、彼自らも軍人であり政治家であつて、特にペリクレース時代のすぐれて政治的意識の高い時代に生い立つたことと合せ考えれば、イェガーの述べるように、歴史記述が政治的となつたというよりも、政治的思考が歴史的になつたということもできよう。[13]

ここに再び彼の歴史記述の意図とその作品が永遠に遺るという意味を概観してみよう。トゥーキュディデースは人間性の不変の故に、現在の事実はまた将来も同一あるいは類似の形で起るであろうと信じた。そこで、現在この眼で見、この耳で聞いて、それの厳密な批判によつて正確な智識を獲ることのできる現在の事実を、また、人間性が多方面に現わされたかつてない多くの災厄を含んだ最大規模のペロポンネーソス戦役間の事実を、その事実に基いて正確に記述すれば、事情の変化に応じて種々の形をとつて現われる人間性を、それ故また人間によつて形成される諸事象間のそれを動かす力をも正確に知ろうとするものは、それによつて予備知識を獲ることができ、このヒストリアイは大いに役立つものとなるであろう。こうした正確な智識を獲ればまた先見の明をも養うことができ、それはまた勇気をも生み出して、指導者がこれをもつて国民を導けば、現在及び後世に誉れを遺す輝かしいポリスを建設することができるであろう。[14] こうした精神を底に抱いてトゥーキュディデースは、事実の論証(τεκμήριον)を経た正確な記述こそ永遠に遺るものであろうと考えたのだと思われる。これが彼をしてその『ヒストリアイ』を κτῆμα ἐς αἰεί となると言わしめたものであろうと考えられる。

彼が事情の変化に応じて如何に人間性が現れ出るかを探究したということは、その記述の方法をもつても窺うことができる。即ち、歴史事象の中に法則を求め、事件の相互関連を見ようとするものは、事件の結果から推測しようとするであろう。しかし、彼はそのようなものを求めたのではなかつた。現在の各瞬間において人間は如何に考え、如何なるものによつて動かされるであろうかを事実の中に見ようとしたのである。それは、ὡς δ' ἂν ἐδόκουν ἐμοὶ ἕκαστοι περὶ τῶν αἰεὶ παρόντων τὰ δέοντα μάλιστ' εἰπεῖν (i. 22. 1) という表現からも窺い知ることができよう。[15] その

ために、彼は悲劇によつてとられたと同じような記述の仕方を用いた。即ち、各瞬間はあらゆる可能性をもつているが、それがどう展開するかは予測されないものとして、その瞬間における人間像を画こうとしたのである。それがために彼は弁論を用い、また、悲劇に見られるような構成を用いた。その一例を挙げよう。

シケリアー遠征に対して、エゲスタ人の使者はアテーナイへ来て、自分達は神廟や国庫に夥しい資金を用意しているから、自分達を援助するためにシケリアーへ軍隊を送つてもらいたいと言つた。それが真実ではないことは記述するトゥーキューディデースは無論知つている。しかし、それは真実ではなかつたと、すこし初めにほのめかすだけで（vi. 8. 2）、決して断定をしないし、その説明をしない。そして、それを聞いてアテーナイ人は民会を開いて、援軍を送るべきか否かを決議する。その席上、ニーキアースは「かの地に用意されているといわれるエゲスタ人の手許に在るものは、おそらくそれも話によれば用意されているであろうと考えるがよい」（vi. 22）という。ニーキアスはそれが真実でないことを予想していたのであるが、アテーナイ人はそれと知らずに援軍を出す。それが全くのまやかしものであることは後に（vi. 46）に明らかにされる。ニーキアース以外のアテーナイの諸将はそれを知つて驚く。

このように弁論を用い、悲劇的構成を用ふれば、如何に各瞬間に人間が考え行動するかを如実に考察し得ることは、これをもつても明らかとなろう。[10]

七　むすび

トゥーキューディデースの歴史記述の意図はどこにあるのか。その文体から、あるいはその思想から、当時の彼をめぐる種々の人々との関連から考察せられて来た。しかし、まだ纏つた形では充分に説明があたえられなかつたように思われる。文体はゴルギアース、プロディコスの影響を受けるといわれ、また、アンティポーンを弁論術の師とするとも考えられた。また、アナクサゴラース、アポローニアのディオゲネース、デモクリトスなどの哲学者との間に文体の類似が指摘され、また、ヒッポクラテースなどの医学者たちとの関係やソポクレース、エウリピデースなどの悲劇詩人との関係も論じられた。また、プロータゴラース、

ヒッピアースなどのソフィステースとの関係も論じられた。果してトゥーキューディデースは誰れからその影響を受けたのであろうか。これは容易に断定することはできない。偉大な精神が常にそうであるように、当時の諸々の思想や技術を、あるいは意識的にあるいは無意識の中に自らの中に吸収し、それを独自のものとして、独自の表現で記述し出したという外はない。

それ故、そこに現わされた彼のヒストリアイは、彼の思考と彼の経験とを通じて、生き抜かれ戦いとられた精神であつて、それが彼の歴史記述をなさしめたものであつた。それ故、歴史記述の意図もその精神から理解されなければならない。永遠の所有の意味もその記述態度である科学性からのみ理解されてはならないし、ギリシア歴史学において一般に考えられる自然探究という面からのみ一般化してもならない。彼が歴史を記述してゆく間に、事件を親しく見、あるいはその事件を人々を通じて聞き正してゆく間に、常に心に画き、常に憂慮し、常に願つていた彼の精神を、『ヒストリアイ』全編の中に吟味し読みとらねばならない。私が吟味し理解した範囲においては以上のごとくであつた。

彼は人間性を（自然一般をも無視するわけではないがとりわけ）事情の変化のうちに探究しようとする熱情に燃えていた。そして、その事実に基いての正確な記述が、人間の行為にとつて最も重要な先見の明を生みだすものであるとの信念が、彼をして『ヒストリアイ』を記述せしめたものであると見らる。

「戦士諸君、諸君は勇敢な人間に（ἀνδράσιν ἀγαθοῖς）ならねばならない。……アテーナイ人はポリスの偉大な勢威を、たとえ地に墜ちていようと、再び立ち直らせるであろう。人間がポリスであつて、城壁や空になつた艦船がポリスではない（ἄνδρες γὰρ πόλις, καὶ οὐ τείχη οὐδὲ νῆες ἀνδρῶν κεναί）」（viii, 77, 7）。「家屋や土地を悔むべきではなく、人命をこそ嘆ずべきである。なぜなら、それらが人間を獲得するのではなく、人間がそれらを手に入れるからである（οὐ γὰρ τάδε τοὺς ἄνδρας, ἀλλ' οἱ ἄνδρες ταῦτα κτῶνται）」（i, 143, 5）。

トゥーキューディデースはすぐれた諸将にこう語らしめる。それは彼自らの創作であつたといえないにしても、彼もまた心にそう願つていたのである。先見の明をもつての

勇敢な行為、それによつてのみ、後世にも偉名をとどろかせるポリス建設の可能性があると見ていたのである。彼にとつて重大な研究課題は、まことにこの活動する「人間」(οἱ ἄνθρωποι) なのであつた。ヤーコブ・ブルクハルトが「われわれの出発点はただ一つの、存続し、且つわれわれにとつて可能な中心、すなわちかつてあり、今あり将来あるであろうところの耐え忍び、努力し、行動する人間である」(J. Burckhardt, Weltgeschichtliche Betrachtungen, Kröners Taschenausgabe, S. 5) といつたように、[11] トゥーキューディデースにとつても活動する人間が中心課題であつた。この人間を中心とした考え方も無論、当時のアテーナイ社会と関連のあることは云うまでもなかろう。

また、われわれは旧約聖書を読むとき、祖国イスラエルの分裂し崩壊してゆく様が、いとも冷静に非情とも見える精神で画き出されているのを見る。これもひとえにヤーウェへの信仰に支えられていたが故と言うことができるであろう。[12] トゥーキューディデースも臨牀にある医者のように、私見を交えず、遍見をもたず、淡々と事実を記述し、自身の追放についての弁護すらしない。[13] それは医学などによる科学的な研究技術を身につけていたからというよりも、むしろ、事実を事実によつて記述するこの『ヒストリアイ』が、将来事の真相を研究しようとするものに真に役立つという信念が、あの科学的な歴史記述を遺さしめたものであろうと考えることができる。

① W. Schadewaldt, Die Anfänge der Geschichtschreibung bei den Griechen, Antike 10. 1934. S. 166.

② J. B. Bury, The Ancient Greek Historians, 1908, p. 243. 参照。

③ W. A. Gomme, Essays in Greek History and Literature, 1937. p. 124. は次のように述べている。

The aim of each of them [Herodotus and Thucydides] was a scientific one: to record what had happened. But it is necessary to be accurated about what Thucydidet had in mind when he stressed the importance of his theme.

また、同じ課題を近くは Klaud Weidauer (Thukydides und die Hippokratischen Schriften, Der Einfluß der Medizin auf Zielsetzung und Darstellungsweise des Geschichtswerks, 1954) はヒッポクラテース文書との関連から解こうとしている。

④ *μοῦσ' ἤρ' ἀοιδὸν ἀνῆκεν ἀειδεμέναι κλέα ἀνδρῶν* J. B. Bury. Op. Cit. p. 242.

⑤ K. Löwith, Welt und Weltgeschichte. 1958. 『世界と世界史』（柴田治三郎訳九六頁）

⑥ J. B. Bury, Op. Cit. p. 81 ; C. N. Cochrane, Thucydides and the Science of History, 1929, p. 2 ; A. W. Gomme, A Historical Commentary on Thecydides, 1945. Vol. I. p. 149. 参照。

⑦ G. B. Grundy, Thucydides and the History of His Age, 1948, p. 8. J. H. Finley, Thucydides, 1942, p. 67. 参照。

⑧ ヴルンハイム（『歴史とは何ぞや』岩波文庫二三頁）はトゥーキューディデスの歴史を教訓的或は実用的歴史として規定している。A. W. Gomme, Commentacy Vol. 1. p. 150.

⑨ K. Weidauer, Thukydides und die Hippokratischen Schriften, S. 58 ff. 参照。

藤縄謙三氏（「ツキュディデスの思想の変遷について」『西洋史学』33、二八頁）は、これら一般の諸解釈とは異つた独自の見解を発表されている。が、トゥーキューディデースが亡命後その思想に変化を生じたと強調しようとする余り、無理な解釈をされているように思われる。

⑩ Cicero, Or. 39. Herodotus sine ullis salebris quasi sedatus amnis, Thucydides incitatior. Cf. De Or. ii. 55. 56 ; Dionysios Halikarnasseus, de Thuc. 24.

トゥーキューディデースの文体については F. Blass, Attische Beredsamkeit². 207 ff ; E. Norden, Die Antike Kunstprosa, 95 ff ; A. W. Gomme, Essays in Greek History and Literature, 156 ff. など参照。

⑪ 一般にドラマティックであるといわれる意味は、プルータルコスに見えるように、彼の語らしめる人物が生々とその性格に応じて画かれているということである。F. M. Cornford, Thucydides Mythistoricus p. 129. *ὁ Θουκυδίδης ἀεὶ τῷ λόγῳ πρὸς τὰ ὐτὴν ἁμιλλᾶται τὴν ἐνάργειαν, οἷον θεατὴν ποιῆσαι τὸν ἀκροατήν*, Plu tarchos, de Glor. Ath. 3. また A. W. Gomme, Essays in Gr. Hist. and Liter. p. 187: Commentary. II. p. 144. 参照。

⑫ J. B. Bury. Op. cit. p. 106.

⑬ F. M. Cornford, Thucydides Mythistoricus, p. 132.

その他の例として i. 128 ff ; ii. 29. などが挙げられる。

⑭ こうした科学的な態度は当時の医学理論との関連から論じられている。C. N. Cochrane, Thucydides and the Science of History. p. 8.「古医学」の筆者は次のような記述を残している。

「もし人が、誰れが生き長らえ、誰れが死に、誰れの病気は長びき、誰れのは早く癒えるかを予知しよう（*προγιγνώσκειν*）とするならば、すべての徴候をまず学びとらねばならない（*τὰ σημεῖα ἐκμανθάνοντα πάντα*）。それから、それらに関係のある重要な事柄を考慮しながら判断を下すことになるであろう。即ち、彼はその他の徴候や証拠などについて、よく知つていなければならない（*εἰδέναι περὶ τῶν τεκμηρίων καὶ τῶν ἄλλων σημείων*）。というのも、いつ、どこにおいても、悪い徴候は同じ悪い状態を、良い徴候は、それとは反対の状態を意味するからである」（Hippocrates, De prisca medicina XXV）*σημεῖον* は過去に、*τεκμήριον* は将来に関しての意に用いられることが

ある。F. Blass, Die Attische Beredsamkeit. S. 115. トゥーキューディデースがここに用いる τεκμήριον は、単なる証拠の意味ではなく、種々の証拠から導き出された結論を意味するとゴンム（A. W. Gomme, Commentary）は述べる。

⑮ 『ヒストリアイ』に出てくるその他の例（ii. 41. 2 ; iv. 122. 6 ; 126. 4 ; vi. 87. 1 ; vii. 67. 4）も、パルメニデースによつて初めて明確にされた δόξα や αἴσθησις に対立する真理という意味ではなく、ψευδος（cf. Gorgias, frg. 11. 1 ; Kritias, frg. 25. 26）に対立する真実という意味をもつている。シンクレア（T. A. Sinclair, A History of Greek Political Thought, 1951. p. 113）もこの点を指摘している。また、トゥーキューディデースはプロータゴラースによつて αλήθεια と呼ばれたものを ακρίβεια としているとアーリは述べている。W. Aly, Formprobleme der Frühen Griechischen Prosa, Philologus Suppl. XXI. Heft. III. 1929. S. 24.

⑯ トゥーキューディデースは彼以前の歴史家を λογογράφοι と呼んで（i. 21. 1）自らと区別しようとするが、〈カタイオスもその『ヒストリアイ』の冒頭に τάδε γράφω, ὥς μοι ἀληθέα δοκέει εἶναι と述べ、〈ヘーロドトスも τῇ γέ μοι φαίνεται εἶναι ἀληθές（vii. 139. 1 ; cf. ii. 99. 1）と述べて真実を述べんと留意している。また、W. Schadewaldt. Antike 10. S. 145. 参照。

⑰ W. Jaeger, Paideia. 1. S. 387. ; また、グランディ（G. B. Grundy, Thucydides and the History of His Age. ii. p. 3）はシケリアーにおいて φύσις 思想の再発展を見、それを法延弁論との関連から見ようとしている。更に、K. Weidauer, Thukydides und die Hippokratischen Schriften, S. 32 ff. 参照。

⑱ 環境に応じて人間の性格に変化のあることは、当時の医学理論においても見出される。C. N. Cochrane, Op. cit. pp. 9 ff, 参照。

⑲ トインビーも、ある意味では歴史は繰返すという形で人間性の不変を考えている（『試練に立つ文明』深瀬基寛訳五二頁以下）。更に、προειδώς のもつ意味の分析はヴァイダウェル（Thukydides und Hippokratischen Schriften. S. 60 ff）に見える。

⑳ 田中美知太郎「ソクラテス以前に於けるピュシスの意味」（『哲学研究』第十四巻七六七頁以下）。山内得立「アリストテレスの『自然』」（『哲学史研究』第一冊一頁以下）。H. Leisegang, φύσις［P. W］参照。

アリストテレースはプュシスを定義して「第一の厳密なる意味においては事物がそれ自身の中に運動の原因としてそれ自らに有するところの事物のウーシア（ἡ οὐσία ἡ τῶν ἐχόντων ἀρχὴν κινήσεως ἐν αὐτοῖς ἢ αὐτά）である」（Metaphysica Δ 4. 1015a）とする。

㉑ プラトーンがヒッピアースをして「われわれは法においてではなく自然において同族、肉親、同市民である」（Prot. 337C）と云わしめているが、ピュシスとノモスとの対立としての実際的使用は、ヒッピアースがアテーナイに活躍した時代、即ち、前四二〇年代の中葉以後のことであろう（F. Heinimann, Nomos

und Physis, 1945. A. Lesky, geschichte der griechishen Literatur, 1957. S. 329. より)ともいわれているが、両者の対立は思想としては更に古く、パルメニデース以来のものであると考えなければならない(田中美知太郎『ソフィスト』筑摩書房一七九頁参照)。

㉒ 彼の記述する演説は、語られた通りを写したものか、それとも彼の創作であるかと種々論じられて来たのであるが、現在では、彼が方法の章に述べるところにそつて理解するのが妥当な解釈とされている(A. W. Gomme, Essays in Greek History and Literature, 156 ff 参照)。このメーロス人の対話についても大体その線を支持することができるだろう(W. Eberhardt. Der Melierdialog und die Inschriften ATL A9 (1G 1² 63+) und 1G 1² 97+, Historia VIII, 1959. Heft 3, 284 ff)。

㉓ 無論、ここでは強者が弱者に必ず勝つという見方をしているのではない。劣勢の者が時に優勢の者に勝ち得ることもあり得る(ii. 11. 4)。何が強者であるか、思慮あるものか、勇気をもてるものか、あるいは内訌期におけるように比較的智力に劣等なものか。それこそ彼の探求しようとするものの一つであつた。

㉔ W. Jaeger, Paideia II S. 15 „Bei Thukydides fanden wir den gleichen Begriff (φύσις scl) im historischen Sinne verwandt und sahen, wie sein ganzes geschichtliches Denken aus den Voraussetzung einer sich in ihren Grundzügen zu allen Zeiten gleichbleibenden „menschlichlichen Natur" entspringt."

E. Howald, Vom Geist antiker geschichtsschreibung, 1944, S. 81 はトゥーキューディデースを Naturforscher と呼ぶ (H. Bengtson, Griechische Geschichte, 1950.S .205)。

㉕ クロワーゼ (M. Croiset. Histoire de la littérature grecque, iv. 113) やコムペルツ(Th. Gomperz, Greek Thinkers (E. T.) i. 503) などはこの見解をとつている。

それに対する批判として F. M. Cornford, Thucydides Mythistoricus, p. 68 ff ; p. 99 ff. 参照。

また、トゥーキューディデースが φύσις に関連して用うる ἀνάγκη は Notwendigkeit にではなく Wahrscheinlichkeit には例反応するものであると K. Weidauer (Op. cit. S. 38 ff) 証している。

㉖ F. M. Cornford, Plato's Cosmology², 1952. p. 169 ff. 参照。ここにおいて、当時「必然」と呼ばれる言葉が何を意味したかが詳細に論じられている。

㉗ J. B, Bury, The Ancient Greek Historians, p. 258. F. M. Cornford, Thucydides Mythistoricus, p. 59. p. 101. 参照。

㉘ ギリシア人の歴史観を theologia naturalis との関連から考察しているものに K・レーヴィット『世界と世界史』がある。

㉙ 藤縄氏(『西洋史学』33 二六頁)はトゥーキューディデースもその『ヒストリアイ』を書こうと意図した当初においてはヘーロドトスと同じものをもつていたと考えられるが、既に註⑨で指摘したように、トゥーキューディデースの思想に変化を求められる余り、両者の生い立つた環境の相違を考えに入れられ

ずに出された結論であると思われる。J. H. Finley, Thucydides, p. 18. 参照。また、トゥーキューディデースの記述は初めには対象自体に永遠の価値を認め、後には没価値的純学問的見地から同じく永遠の価値を主張したとも論じられるが、ここにいわれる純学問的な立場というものは、既に指摘したように、当時にはなかつたものだと思われる。

㉚ Th. Gomperz, Greek Thinkers. i. 503. A. Lasky, Geschichte der Griechischen Literature. S. 454. 参照。

㉛ J. H. Finley, Thucydides, p. 77; W. Schadewaldt, Antike 10. S. 168. 参照。

㉜ R・K・ブルトマン『歴史と終末論』（岩波現代叢書中川秀恭訳）一五〇頁以下参照。

㉝ 『ヒストリアイ』の中に見られる ὕβρις, ἐλπίς, ἔρως などに関する考え方が、アイスキュロスやソポクレースなどの悲劇詩人のそれと共通するもののあることをコンフォードは指摘している。F. M. Cornford, Thucydides Mythistoricus.

㉞ コンフォード（Thucydides Mythistoricus, 82 ff）に詳わしく論じられる。

㉟ 藤縄謙三氏（「ツキュディデスにおけるアテナイの政治についての分析」『西洋古典学研究』Ⅳ三三頁）は「理性の如きものと盲目的感情との対立は、個人の精神に内在する対立としてではなく、ポリスという一個の主体における指導者の理性と盲目的な民衆との対立として現われる」と述べていられるが、確かにこのように見ることも出来るのであつて、ここにおいても一般的な「人」とするよりも国家の「指導者」とする方が適しいであろう。

この点については既に W. Schadewaldt (Die Geschichtsschreibung des Thukydides, 1927. S. 72) も指摘している。"——das ist der Sinn des Satzes I. 22. 4——politisch interessierten und urteilfähigen Menschen——für die grosse Masse schreibt er ja nicht——die Möglichkeit geben, sich im politischen Geschehen der eigenen Zeit zurechtzufinden," (K. Weidauer, Op. cit. S. 82)

㊱ J. H. Finley, Thucydides, p. 50. 58. 参照。

㊲ W. Jaeger, Paideia I 482; J. H. Finley, Thucydides, 18. 参照。

㊳ アテーナイにおける寡頭政治も、それは大事業であつたが、多くの賢明な人達によつてなされたので自然（οὐκ ἀπεικότως）成功した（viii. 68. 4）と述べているし、また、ギリシア人が事をなすには多数の艦船と賢明な提督たる人物と不屈の熱意とがいる（i. 74. 1）とも語らしめ、トゥーキューディデースが『ヒストリアイ』を記述するにあたつて、初めから何らかの形で、すぐれた指導者によつて立派な国家の建設されることを願つていたことは否定できない。

㊴ H. Patzer, Das Problem der Geschichtsschreibung des Thukydides und die thukydideische Frage, 1937. S. 38.; … τὰ παρόντα sind demnach immer Entscheidungs situationen, die als solche die Entscheidung des in ihnen Stehenden

anfordern." 更に、K. Weidauer. Op. Cit. S. 67. 参照。

⑩ しかし、弁論の用い方に『ヒストリアイ』の前半と後半には少しの変化があるように感じられる。即ち、前半を分析的静止的であるとすれば、後半はより動的なより劇的なある種の緊張のあるのを感ずる。ここにトゥーキューディデースの記述の態度に何らかの変化のあることを論ずることができるかも知れない。既に指摘したように根本的な精神には何らの変化も認めることはできないのであるが。

⑪ R・K・ブルトマン『歴史と終末論』中川訳九八頁参照。

⑫ ウェルネル・ケラー『歴史としての聖書』山本七平訳四八二頁参照。

⑬ ὁ μὲν τὰ ἐν Ἠιόνι καθίστατο, ὅπως καὶ τὸ αἰτίκα, ἢν ἐπίῃ ὁ βρασίδας, καὶ τὸ ἔπειτα ἀσφαλῶς ἕξει, δεδεήμενος τοὺς ἐθελήσαντας ἐπιλωρῆσαι ἄνωθεν κατὰ τὰς σπονδάς (iv. 107. 7)

ここに見られる以上に彼は自分の行為を述べてはいない。しかし、ここに見られるように τὰ αἰτίκα と τὸ ἔπειτα とに配慮すれば、将として非難すべきものはなく、またそれ以上の説明も彼にとつては必要ではなかつたのであろう。事実の正確な記述がすべてを証するであろうと信じていたのであるから。

Salt Merchants in the *T'ang* 唐 dynasty

by

Hiroo Yokoyama

Salt was monopolized in the middle of the T'ang 唐 era. At the very biginning the salt monopoly was considered as a temporary measure to meet the disorder after the *An-Shih* 安史 Rebellion, but it remained through the whole era without abolition because of its gradually growing proportion in the state finance, and then it was succeeded and completely equipped by the dynasties after *Sung* 宋.

This article is to trace the character of salt merchants in the period of forming salt monopoly who acted between *Yen-ch'ang* 塩場 and *Min-hu* 民戸; the character of salt merchants was that their birth was from great landlords or wealthy merchants who could pay *Yen-li* 塩利 to *Yen-ch'ang* 塩場 at a time and at once they had that of patent merchants, by the character of which their land absorption downward was considered to be executed. Besides, while they were patent merchants in the court, it is remarkable they turned to have a close contact with local *Tsieh-tu-shih* 節度使, culminating in their gradual anti -*T'ang* 唐 character.

Thukydides' Intention in Writing History

by

Yasumi Nagai

Thukydides said he wrote his 'Historiai' in behalf of 'eternal possession' not for a temporal applause. His intention has been understood from various aspects to this day; in his scientific attitude to write history, or in the relation of everlasting and constant phusis. These interpretations, however, ever included the understanding somewhat by analogy in the methods of modern historical study, which makes clear understanding of his intention very difficult.

This article tries to understand the meaning of 'eternal possession' through analysis of his true intention, by revising his 'Historiai'. His true intention lies in enlightement of a concrete and present correspondence of everlasting and constant humanness to the succeeding

transition. Correct knowledge should be supplied by the then fact, the Peloponnesos War, which followed many disasters that ever had and gave chances of many-sided investigation in human character. The constancy of humanness helps one to have foresight corresponding to similar facts. Supported by the spirit that a brave and farseeing leader could make a honourable polis in history, he thought correct writing of facts made 'eternal possession'.

On Kôden 公田

by

Yasuo Izumiya

Because of a wide-spread and easy-going conception that *Jôden* 乗田 stood for the very *Kôden* 公田 meant by *Ryônoshûge* 令集解, in spite of a frequent appearance of the word '*Kôden*' in resources of *Ritsuryô* 律令 era, the fundamental study on this point seems to be untouched, but without this full recognition one cannot fully understand the transition of landholding system in *Ritsuryô* system and the formation of manorial system. From this point of view this article tries to research *Kôden* fundamentally. *Kôden* meant originally farm land before *Kubunden* 口分田, while it, by being cultivated, seemed to be treated as *Yuchishiden* 輸地子田. By enforcement of the *Yôrô* 養老 law, however, it was authorized to earn by cultivating for six years as *Yusoden* 輸租田; in the first year of *Tenchô* 天長 the period to earn by cultivating was postponed to life-time. Along with the dissolution of the *Gôko* 郷戸 system, *Kôden* was identified with *Kubunden*. After the eleventh century the authorization of lord right on *Kôden* resulted in the use of the word *Kôden* which meant *Yusoden* correlative against *Fuyuso* 不輸租 manor. Such transition of *Kôden* naturally followed change in meaning of *Shiden* 私田 and manor.

Life of City Nobles at the Beginning of the Tokugawa Era

by

Shûichi Murayama

The life of city nobles, from the *Azuchi-Momoyama* 安土桃山 period to the first *Edo* 江戸 period, so-called reorganized feudalistic